

「英語科教育法 II」における模擬授業の評価

英語教育講座・池野修

1. 授業の概要

「英語科教育法 II」は、模擬授業を主活動として、受講生が英語授業の実践的指導能力を習得することをねらいとする授業である。受講生は、まず担当教員との何度かの打ち合わせを通してレッスンを構想する。実施した模擬授業はビデオに録画し、リフレクションではそれを見ながら、授業者が自分の授業を様々な観点から省察する。

この授業の到達目標は次の 2 つである。

- (1) 所属グループのメンバーと協力しながら、英語授業 (50 分) を構想し、実際に授業を実施し、それについて集中的な省察を行うことを通して、英語授業に対する実践知が深まっている。
- (2) 他の受講生による模擬授業の体験と考察、担当教員による解説、模擬授業レポートでの授業分析などを通して、英語授業の方法に関する専門的知識が豊かなものになっている。

今年度の受講生は 40 名であり、基本的に 3 人からなるグループを 13 つ作り、毎回 1 グループの模擬授業を実施した。

模擬授業の効果を高め、実践的指導能力の向上を支援するために次のような工夫を行った。

- (A) 模擬授業マニュアルの作成—模擬授業の留意点、どの時期にまでに何をやるかのチェックリスト、学習指導案作成時のチェックリストなどを詳細に記したマニュアルを作成した。
- (B) 各グループとの 2 度の事前指導—原則として、模擬授業実施 2 週間前までに第 1 回事前指導 (20 分程度)、1 週間前までに第 2 回事前指導 (60 分程度) を行った。特に第 2 回事前指導においては、授業内容や指導案の細部に渡るまで詳細に確認をした。それぞれの活動意図の確認、授業構成や活動形態の吟味、予想されるつまずきの指摘、代替案の提示、指導案の形式や表記のチェックなどを行った。
- (C) 模擬授業の録画→ビデオ視聴による省察—各グループは自分たちが行った模擬授業の録画ビデオを授業終了後 1 週間以内に視聴した。
- (D) 受講生による詳細なコメント—模擬授業を受けた後、学生は (i) ねらいの明確さ&ねらいと授業内容の整合性、(ii) 教師としての授業態度、(iii) 実際に中学生・高校生に受けても

らいたい授業かどうか、(iv) 教職を目指している人にとって有益な模擬授業かどうかという観点からの 5 段階尺度評価、そして工夫していると思われる点&参考になった点、疑問点&より良い授業にするための提案についての自由記述評価を行った。

- (E) 模擬授業レポート—模擬授業ビデオの視聴、他の受講生によるコメント、担当教員による指摘なども参考にしながら、模擬授業の成果と課題、もう一度行うのであればどこをどのように修正するか等について、5 ページ程度のレポートを書く課題を課した。

2. 授業評価方法

学期末に実施した授業評価アンケートでは、様々な点について質問を行なったが、ここでは (i) (講義や授業観察ではなく) 模擬授業でこそ学べたと感じたこと、(ii) 模擬授業の効果を高めるために行った工夫の効果、(iii) 模擬授業改善への提案の 3 つについて、関連データを参考に考察することにする。なお、授業時間外での提出としたことも原因で、回答数は 30 (未回答 10) であった。

3. 授業評価結果と考察

まず、講義、グループ討論、授業観察、授業案作成、言語活動体験などではなく、模擬授業であるからこそ学べたことについて、受講生は様々な回答をしているが、以下はその中のいくつかである。

- 授業のひとつひとつの活動や説明、発言内容に明確な目的を持たせるように意識するようになった。
- 時間的制約というのは大きな課題である。制作段階でもこの制約に苦しめられた。見ている時には 1 分 2 分の差なんて感じないが、実施にはその小さな時間でできること、できないことが生まれるということを学ぶことができた。
- 授業は対応力であること。はじめは計画したことをこなすだけしか頭になかった。
- 「教育のための英語の知識」が増えた点です。具体的には、どうすれば理解しやすいか、構成・難易度はどの程度にするのが良いかということが考えられます。(←単に英語コミュニケーション

ン能力が高いだけでは効果的な英語授業はできないということ。)

次に、模擬授業の効果を高めるための工夫（前ページ (A)～(E)）の有効性について、「1」（＝全く役に立たなかった）～「5」（＝非常に役に立った）の5件法尺度で受講生に回答を求めた。回答結果は以下の通りである（数字は回答者数）。

表 1. 模擬授業の効果を高める工夫の有効性

	1	2	3	4	5
(A) 模擬授業マニュアル	---	---	---	7	23
(B) 担当教員との打ち合わせ (2回)	---	---	---	4	26
(C) 模擬授業を記録したビデオ視聴	---	---	---	7	23
(D) 他の受講生のコメント	---	---	---	8	22
(E) 模擬授業レポートの作成	---	---	---	11	19

上記の結果が示すように、模擬授業の効果を高めるために行った授業者の工夫は、おおそ肯定的に評価されている。ただし、自分たちが行った模擬授業についてレポートを書くということについては、他の工夫に比較して「5」を選択している受講生が少ないのは気にかかる点である。

次に、他のグループが行う模擬授業を受講し、受けた授業の中から4つを選んでレポートを書くという課題について、それが授業実践力を高める手段としての有効であったかどうかを受講生に尋ねた。結果は表2の通りである。

表 2. 他のグループが行った模擬授業の有効性

	1	2	3	4	5
(A) 他のグループの模擬授業の体験	---	---	---	11	19
(B) 他の模擬授業のレポート作成	---	---	2	16	12

表2の(B)の結果を見ると、レポート作成の重要性は全ての受講生に十分に認識されている訳ではない。来年度はレポート課題の意義についてより明示的な説明を行なうつもりである。

「英語科教育法II」で行った模擬授業には様々な課題があったが、重要なものとしては、(i) 授業時間が90分では足りないこと、(ii) 受講生によるコメントの共有ができていないこと、(iii) 授業外課題が不十分であることの3つがあげられる。

授業時間の不足について、授業時間90分の割

振りは、授業の背景説明(3分程度)→模擬授業(50分)→それに関する授業者による解説(5分程度)→授業評価シートの記入(15分程度)→授業担当者(池野)による解説(5～10分)としていた。模擬授業についての質疑応答を行う時もあった。本来は、受けた模擬授業についてグループで話し合いを持ったり、その議論内容をクラスで共有したりする時間が欲しいところであるが、時間的制約を克服するのは困難であった。この問題の解決方法として、受講生からは次のような提案がなされている。

- 10時20分に開始して、授業者の説明を30分までやって、10時30分から模擬授業をスタートできたら良い。
- 私は多少休み時間が短くなっていいので、グループディスカッションの時間が欲しい。
- 授業中に書いている模擬授業コメントを宿題にすることで、その分討論する時間にしよう。
- 補習時間を1時間とって、今までの振り返りをするよいいのではないだろうか。

これらの提案がどの程度受講生全体の賛同を得られるかは確かめてみなければ分からないが、来年度検討はしてみるつもりである。

2つ目の問題は、授業コメントの共有に関するものである。模擬授業終了後に、受講生一人一人が授業教科シートに記入したのであるが、他の受講生がどのようなコメントを書いているのかを知る機会はなかった。他の受講生の考えを知りたいと思うのは当然であり、また多様なコメントから学ぶことも多いはずである。この点について、受講生の提案には「池野先生のHPを作り、他の受講生が書いたコメントを見ることができるようになればいい」というものが含まれている。この可能性についても来年度は検討してみたい。

最後に、授業外の課題少なかった点については、次のような提案が見られた。

- 模擬授業後にコメントシート、録画ビデオを見て、それをもとに授業者がコメントを添えたA4 1枚程度の振り返りシートを作成(グループで1～2枚程度)、次の回までに配布する。
- 模擬授業のレポートを毎週提出させるということを提案したい。
- 他のグループが模擬授業をするにあたって、事前にどのような内容を扱うのかを聞いておいて、全員が何らかの案(指導案)を持って模擬授業を受けるようにしたほうが良いと思った。

これらの提案を実際に実行すると、受講生のかんりの負担増になりそれを問題点としてみなす学生も出てくるかも知れないが、負担に見合う結果が期待できれば実施を考えたい。